

# ブラザー軒

詩 菅原克己

東一番町 ブラザー軒 ガラスのれんが キラキラ波打ち  
あたり一面 氷を噛む音

死んだ親父が入ってくる 死んだ妹を連れて  
氷水食べに 僕の脇に  
色あせたメリンスの着物 おできいっぱい付けた妹  
ミルクセイキの音に びっくりしながら  
細いすね出して 細いすね出して  
イスにずり上がる イスにずり上がる

外は濃紺色の七夕の夜 太った親父は小さい妹を眺め  
満足げに氷を噛み ひげを拭く  
妹はさじですくう 白い氷のかけら  
僕も噛む 白い氷のかけら  
二人には声がない 二人には僕が見えない  
親父はひげを拭く 妹は氷をこぼす

のれんはキラキラ 風鈴の音  
あたり一面 氷を噛む音  
死者ふたり連れだってかえる 僕の前を  
小さい妹が先に立ち 親父はゆったりと  
ふたりには声がない ふたりには声がない  
ふたりには僕が見えない 僕が見えない

東一番町ブラザー軒 七夕の夜  
キラキラ波打つ ガラスのれんの向こうの闇に